

(1面から続く)

学習にはつながっていかないのではないか。言葉にはいろいろな意味があることを分かっていないと、パソコンやスマートフォンを使っても正しい漢字を選ばなくなるのではないかと。いろいろな意味がある中、どれにあたるのかを考えて選ぶことで、言葉を自分の中に落とし込んでいくことができる。

単語だけで成り立つ会話もたらずものは

○司会 子ども同士の会話の中では長い文章は必要ないかもしれないが、そういうことが結果的にどういう影響をもたらすだろうか。

○山口 単語だけの会話では成長するに従って限界があるだろうし、「コミュニケーションスキル」の低下とか、自分の思いがきちんと言葉で伝えられないことによる弊害があると思う。単語で終わらせてしまうと、その瞬間の感覚で終わってしまうように感じている。

○司会 「うまく伝えられない」という状況は、逆に、相手の話も聞けていないというところか。

○山口 授業中や話し合いの場面でも、相手の話は聞いていると思う。しかしその先

の、相手の考えを受け入れ、それについて自分の考えを発信していくという、次の発信に結びつくような聞き方ができているかという点、まだまだトレーニングが必要だ。

○富永 「今の子どもたちの会話はつながっていかず、途切れてしまう」と、話し合いの授業でも言われている。先ずは「聞ける」こと、つまり「受け入れる」ことが大事。相手が一番伝えたいことは何か、それについて自分がどう思うかを考える練習をする必要がある。それを授業の中でどれだけ教員が意識しているかが問われている。

○石居 相手の発言の些細なところにもたわるあまり、それを受けての次の発言が「そこではないだろう」と思うようなどころに飛んでしまうことがある。相手の発言を的確には捉えられていないのかもしれない。

しかし、それも成長過程の一つである。そういう積み重ねを経て、「違った」「そこではないかったんだ」と、気が付いていけばよいと思う。

子どもとの関わりは量より質！

○富永 家庭だけの問題ではないが、家庭に負うところは実際大きい。「今日は○○したよ」と子どもが伝えた時

に親がその言葉をきちんと受けとめて、「それはよかったね」という言葉をかけてあげば、子どもにとって、とても満足だろう。そういう会話があることは必要だと思う。

○石居 現実には親が多忙になり、子どもが帰宅しても不在ということもあるだろう。そうした状況の中では、「家庭での取り組みを改善してほしい」と言っても難しいだろう。しかし、忙しいだけの問題ではなく、「子どもが何か言った時にどのように捉えてあげたのか」という、質の問題だと思う。

これは教師にも言える。子どもが何か言ってきた時に耳を傾けるゆとりも必要だし、教師であれば余計に意図的な働きかけがあるはずで、そういう場をたくさんもつことが必要だ。

○山口 「どういう時にどう声をかけるか」で、子どもは変わる。教員の価値観にもよる。家庭だったら親の価値観がどこにあるのかで変わって来るだろう。

国語力の改善に向けて



小学生でも手元に紙の辞書を用意したい

○司会 辞書については、紙の辞書を使った方が「調べた感」が強いと思う。私立の小学校1年生の例だが、辞書に大量の付せんが張られ、辞書の重さで厚さもあって、児童たちの「調べた感100パ



いつだって図書館は温かく迎えてくれる

言語に対する関心が高まってくれば、子どもの国語力の土台となる言語の力も上がって来ると思う。

○富永 私も、小学校では、ぜひ紙の辞書を用意してほしいと思う。引くことで五十音の構造や日本語の母音や子音なども分かってくる。

中学校や高校は言葉も増えてくるので電子辞書の利用もあると思うが、小学校では言葉との出会いがある紙の辞書を引きこころを重視したい。

○石居 便利なものが必要に応じて使えばよいが、この子たちには今何が必要かはそれぞれ違う。しっかり見極めなければならぬ。

辞書も楽しい。他の「本」はもっと楽しい

○司会 学校図書館には辞書が配置され、利用しやすくなった。「読書」は、楽しみながら国語力を高めていく方法の一つだと思う。「アクティブ・ラーニング」(課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習)の実施にあたり、本に接する機会を多くもたせることを考えているか。

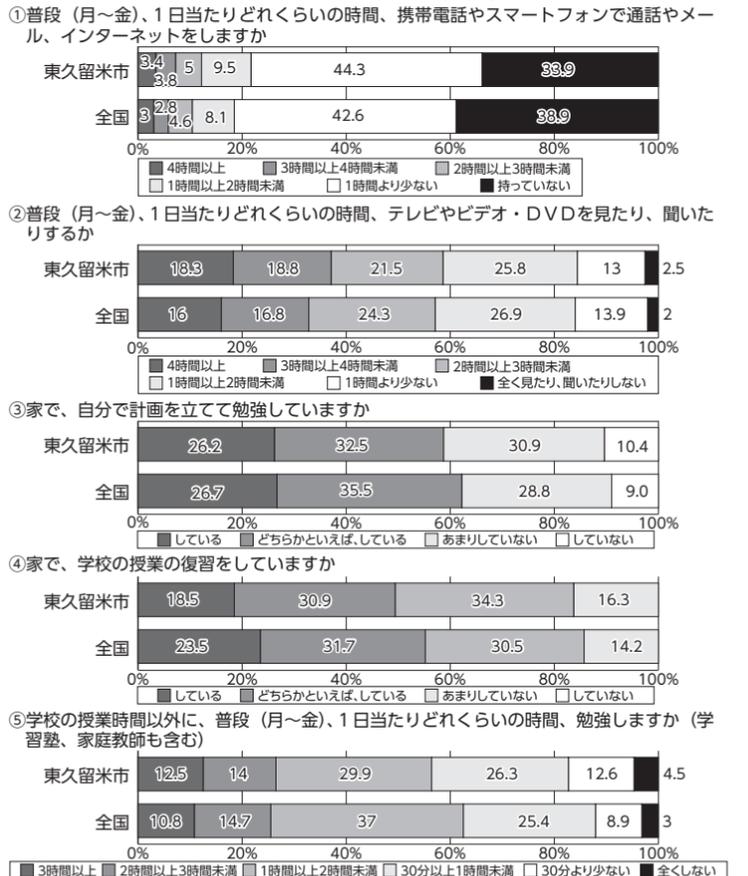
○石居 国語力の基本は読書量によると思う。子どもの時は、漫然といろいろなジャンルの本に当たっていただくだけでもかなり違う。

○山口 言葉に対して関心を持ち、辞書を引きこころを思いつくかどうかは子どもによって大きく違っている。5、6年生になると同音異義語や熟語がたくさん出てくるが、意味が分からないまま漢字の練習をしても言葉は増えないし、漢字の知識も広がらない。

家庭での過ごし方と「学力向上」の関係は…

子どもの「学力向上」と「家庭での過ごし方」はどのように関係しているのでしょうか。「平成28年児童・生徒質問紙調査」(文部科学省・平成28年4月、小学6年生の調査結果の一部を抜粋)によると、本市の子どもたちは全国に比べて、スマートフォン等でのメール、インターネットの閲覧及びテレビやDVDを見ている時間が長いことが分かりました。

図3 小学校における学習に関する意識調査 (抜粋)



子どもの力が付いていくのかを意識していきたい。

教科化される英語も国語力向上につなげていきたい

○司会 ところで、次期学習指導要領の目玉は小学校での英語教育の実施である。国語力の低下が著しい中、国語力の向上に影響が出るのではとの専門家の意見があるが、

○山口 英語の教科化が、直接、国語力の低下につながるのではないと思う。国語に割ける時間が削られることで、担任が、「この力を付けるにはこれだけの時間をこの学習に使いたい」と、その分の時間がなくなっていく「プラスアルファ」としてこれをやりた

いが、そのための余裕がなくなっていく」ということではないかと思う。そういう部分でのつらさはある。

さまざまな取り組みの一つはよいが、限られた時間の中でやらなければならぬ。教育委員会にはトータルで考えてもらえればと思う。

「伝えること」は「書くこと」にあり

○司会 昨年開催された第2回総合教育会議でも、市長と教育委員が児童の国語力向上をテーマに意見交換をした。事前に参観した第5学年の国語の授業では、「読んで正しく理解するには、『書く』ことが必要である」ことがねらいにあった。

私が担任をしていた時は子どもたちに取材ノートを常時持たせ、原稿用紙を渡されたらすぐに書けるような題材を集めさせていた。しかし、今は作文以外にもいろいろ取り組まなければならないことがあるので、子どもの実態に応じた方法を考える必要があるだろう。

○富永 書きなさい、という指導はもう改善していかなくてはならない。書けないのは書けない理由があるからで、そこを教員が踏まえた上で言葉を受け付けていくことが必要だと思う。

(3面に続く)



紙の辞書をめくる感触はいいものです。